

06・秘密の関係になる

『05・八月二十八日、夜』から三日後の九月一日。今日から二学期が始まる。

主人公、校舎へ向かうため、学校へ続く道をぼんやり歩いている。
思い出すのは、夏休みクラウディアと一緒に過ごした事ばかり。

一緒に夜のプールで過ごしたあの日以来、二人は隙を見つけてはこっそり会つた。
外に出る事はなく、すべて学校で会つただけだった。

それでもとても幸せで、毎日はあつという間に過ぎていった。

二人はますます親しくなり、特に夏休みの終わりごろは、まるで恋人のように距離が近
かつた気がする。……あくまで主人公の主観だが。

それに、堂々としていたのがよかつたのか、特に誰かに何か言われる事もなかつた。
それどころか、クラウディアの家庭の事情を知る教師には、主人公がクラウディアを心
配して、熱心に世話を焼いているように見えたらしい。

若い女性教師が、夏休みも家に戻りたがらない女子生徒に、何かと声とかけて、一緒に

過ごす。

生徒側も、特に不快ではなさそうである。

確かに、これは『よい光景』と判断されがちなものだろう。

主人公だつて、自分たちが他人なら、きっと似たような感想を抱いたはずだ。

だけど、『先生は熱心なよい先生ですね』と言われた時は、申し訳なくて泣きたくなつた。

誰も主人公の感情を疑わない。クラウディアさん。

だけど自分は……そろそろ精神的に限界かもしれない。

心が弱すぎると笑つてほしい。

あまりにも早いが、すでに罪悪感で、ばつきり折れそうだ。

自分はちょっと普通じやないくらいクラウディアの事を考えているのに、考えれば考えるほど、彼女を傷つける事をしてしまう。

ああ、もう嫌だもうダメだ。こんな自分いない方がいいんじやないか絶対そうだ。

学校行きたくないです。行きたくないも何も住んでるけど。

勉強したくないです。するじやなくて教える方だけど。

ていうか今日は始業式の後の実力テストの試験監督だから、教える事すらしないけど！

とにかく嫌です。誰かお願ひ。わたしに『今日は休んでいいよ』って言つて！
……と思うくらい、思いつめている。

などと考えていると、反対側の学生寮側の道から、クラウディアがやつてくる。

SE1 ..外の環境音

【頭から流す】

【0—5秒ほどまで流してから**SE2**】

SE2 ..主人公の足音

【頭から流す】

【0—5秒ほどまで流してから**SE3**】

SE3 ..クラウディアが小走りで歩いてくる音

【頭から流す】

【だんだん近づいてくる】

【0—3秒ほどまで流してから**SE3**】

「【とにかく嬉しい】

先生♥』

「主人公」

「あ……」

対するクラウディア、あれから色々考えたが、先日の件については、何も言わない、何も見なかつた事にすると決めた。

もし、主人公を問い合わせて、無理やりあの件について暴けば、クラウディアは主人公の弱みを握る事ができるだろう。そう、えっちな漫画みたいにね。

だが、自分の欲望のためだけに、人の性生活というデリケートな問題を暴くのは、いかがなものか。

もちろん、世の中には暴かれる事を望む人もいるし、もしかすると主人公もそうかもしれない。そんなえっちな漫画、いっぱいあるしね。導入の定番ですよね。

でも、自分はしたくない。主人公が暴かれたい系の変態だと確定していない以上、主人公の名譽が傷つく可能性のある事はしたくない。

そういうご褒美の配布業務は、漫画に限らず、アダルトコンテンツ全般のキャラクターに任せます……。さようなら。定番の導入。私はその道を選ばない。と決める。

そして。手段を選ばない行動は、結局メンタルの弱い私にはできませんでした。確かにそうすれば先生は私のものになつたかも知れないけど、それでもしたくないの。先生が申し訳なさそうにしゅんとしてる顔だけは見たくないから。はあーそれでも我ながら実に勇気がない。己の弱さが恨めしい。でもいいんです。先生の名誉の方が大事だし。『負けヒロイン』って言葉は恋愛を勝ち負けだけで判断しているようで好きじゃないけど、そう呼ばれる事になつても受け入れるつて決めたんです。……あー受け入れはしたけどやっぱ負けたくないな？ ていうか、ベストを尽くさない限りは負けヒロインとすら名乗れなくなない？ 単なる棄権、敵前逃亡ですよねそれ。なぜベストを尽くさないのか？ そう言われちゃう事だけはしたくないっていうか。だったら私は……。もうちょっと露骨にアピールする。と思う。

「【好意をまったく隠さない】

おはようございます。朝からお会いできるなんて嬉しいです♥

今日から二学期ですね」

〈主人公〉

「おはよう……デイデイ……今日はいい天気だね」

「心配そうに」

……先生？」

しかし、クラウディア、主人公の様子が明らかにおかしい事に気づく。

『先生、顔色やばい。会話も噛み合ってないし……』と思う。

バスの一件の時も相当ひどい顔色だったが、今はもつと真っ青だ。

漫画的な表現をすれば、今、主人公の中には、大きな渦がぐるぐる、ぐるぐると巻いている。

「〔真剣に〕

あの。どうなされました。顔色が悪いですよ」

〈主人公〉

「ええー？ そんな事ないよお。

あれえ。前にもデイデイにこんな事言われちゃったよね。わたし」

「〔真剣に〕

あの時よりひどいです。

何か、お困りの事でもあるんじゃありませんか。

すぐに保健室に行きましょう。

お付き合いします

クラウディア、うつかり口が滑るが、慌てて軌道修正する。

『お困りの事でもあるんじやありませんか』なんて、いかにも何か知っているような発言だ。

自分が『主人公の悩み』を察しているのはまずい。知らないふりをしなくては。

〈主人公〉

「大丈夫だよお。今日は試験監督だけだし、へーき……へー……あっ……！」

「あっ！」

主人公、手に持っていた荷物を派手に落とす。

全然『へーきへーき』ではない！ ここがプールならまた落ちている！

SE4 .. 主人公が持ち物を派手に落とす音
【頭から流す】

【0—3秒ほどまで流して**SE5**】

SE5 .. クラウディアが駆け寄る音

【頭から流す】

【0—4秒ほどまで流して**SE6**】

SE6 .. クラウディアが落ちたものを拾う音

【**SE4**と同じ音】

【途中から流す】

【4—7秒ほどまで流して**SE5**】

クラウディア『だめだこれは』と判断する。

主人公の手を半ば無理やりとると、落としたものをさっさと拾い上げて、保健室に連れて行く事を決意する。

「【きつぱりと】

ダメです。荷物下さい。……行きましょう！」

それから『ああ、これも二回目だ。なんか私たち、いつも似たような展開を繰り返して
る。これはこれで、定番の導入ってやつなのかも……』と思う。

一度フェードアウトする。

十数分後。

主人公とクラウディア、教師寮の主人公の部屋に向かっている。

あの後保健室に主人公を連れて行つたところ、主人公には熱がある事が判明した。
主人公は学校を休む事になり、クラウディアはそれを送つていく決意をした。
だが、保健医は主人公が一人で寮に戻るのだと勘違いしている。
もちろん、クラウディアはこれをまったく否定しなかつた。

勘違いしたまままでいてもらう事にしたのである。あくどい。

一方、主人公は『あれ、おかしいな。なんでデイデイが一緒なんだろう……?』と思つてゐるが、二人でいられて嬉しいので、気づかないふりをしてゐる。

主人公、サボリはサボリでも、一年前のプールの日とは全然違う。

自分が一緒にいたいからデイデイをサボらせるなんて、ああ、わたしはなんて悪い先生なんだろう……。と思う。

……そう思うと、ますます目の前がくらくらしてきた。

対するクラウディアは『もはや『教師寮つてこんな風になつてるんですね。初めて入りました♥』なんて演技してゐる場合でもないな。とにかく早く先生を休ませなきや……』と思つてゐる。

主人公から寮内の説明を受けるまでもなく、主人公の部屋へ、迷う事なく進んでいく。

主人公はこれを見て『あれ、なんか妙だな』と思うが、その違和感の原因はわからない。ほんやりした頭のまま、クラウディアに手を引かれてついていく。

S E 7 ..主人公とクラウディアが寮の廊下を歩く音

【頭から流す】

【0~7秒ほどまで流してセリフ】

「先生。さあ、着きましたよ。鍵お借りしますね」

SE8 ..クラウディアが主人公の部屋の鍵を開錠し、ドアを開ける音
【頭から最後まで流す】

SE9 ..クラウディアと主人公の部屋の中へ入る足音
【頭から流す】

〔0-7秒ほどまで流して**SE10**〕

SE10 ..主人公がベッドに座る音

【頭から流す】

〔0-5秒ほどまで流して**SE11**〕

SE11 ..クラウディアがベッド脇の机の椅子に座る音
【頭から流す】

〔0-6秒ほどまで流して、少し間をあけてからセリフ〕

〈主人公〉

「デイデイ……ありがとう……」

「【優しく】

とんでもないです。

【ちよつとだけ怒つて】

やつぱりお熱があつたんじやありませんか。

保健の先生の許可もいただきましたし、今日はこのままお休みになつて下さいね。
さあ、横になつて」

S E 1 2 .. 主人公がベッドに横になる音

【頭から流す】

【0~5秒ほどまで流して、少し間をあけてからセリフ】

〈主人公〉

「……ところでデイデイ、始業式は？」

「【ケロつとしている】

あは。さぼつちやいました。

だつて、先生の方が大事ですし。

何もおかしな事はしてないんですから、堂々としていればいいんです。
二時間目からは出ますから。ご安心下さい」

「主人公」

「そつか……」

主人公、クラウディアの『何もおかしな事はしていない』という言葉が突き刺さる。
主人公としては、十分におかしな事だからである。

主人公は今すぐクラウディアを注意して、始業式に行くようにするべきなのに、それが
できない。一緒にいたくて、頭が回らないふりをしているからである。
申し訳なくて涙が出てくるが、そこでクラウディアが話し始める。

しばらく間。

「【優しく】

あのね、先生。初めてお話しした日の事、覚えてますか？」

〈主人公〉

「？ もちろん」

「プール授業から逃げようとしてる私に、先生は『共犯になろう』って言つてくれましたよね。

悪い事をしたのは私だけなのに。

先生はそんな私をかばつて、一緒に嘘をついてくれました。

【少し間を開けてから】

嬉しかった……。

【声が明るくなる】

だから今日は勝手にお返しがしたかったんです。呼ばれてなくともついてきちゃつた。

だって、体調悪い時にお一人でいるのって、辛いですよね？

もう少しだけここにいさせて下さい」

主人公、いよいよ涙が出てくる。

クラウディアにこれを見られないように、思わず顔をそむけてしまう。

SE13 .. 主人がベッドの上で動く音

【SE12と同じ音】

【途中から流す】

【10~14秒ほどまで流して、少し間をあけてからセリフ】

〈主人公〉

「デイデイは優しいね……」

〔得意げに〕

ふふ。だつて、私は先生の生徒ですから♥」

だが、クラウディアの言葉が、主人公のメンタルをいよいよ碎く。
『デイデイはわたしをこんなに信頼してくれてるので、わたしは、わたしは
……なんてダメな先生なんだあああ』と、ついに正常な思考が崩壊する。
絶対に隠しておかなければと思つていた事を、話し始めてしまう。

〈主人公〉

「……そつか。でも、もし」

「え？」

一方クラウディア、主人公の顔が曇つたので、不安になる。

『え？ 絶対ウケると思った事言つたのにどうして？ 先生の生徒だからいい子つて理屈ダメ？ 事実だが本心ではないっていう、すごい身を削るタイプの嘘をついたのに。私が先生の事単純に先生だと思ってる訳ないでしょ。いつだって狙っていますよ』と思つて いる。

〈主人公〉

「わたしが……」

〔優しく。だが、話が見えず内心混乱している〕

「うん？ なんでしようか？」

〈主人公〉

「デイデイの事、生徒だとは思えないって言つたら、どうする？」

「【優しく】

……先生。それは、どういう意味ですか？」

クラウディア、思わず期待するが、即座に『いやまだ早い』と己を落ち着かせる。ここで、思っていたのと全然違う事を言われたら、自分はものすごく傷つく。そうなれば、冷静でいられなくなり、口が滑る恐れがある。

たとえどんなにうつかりしても、例の件について話してはいけない。

ここまで憔悴している主人公に追い打ちをかけてはならない。警戒しなくては……だが、次の瞬間、クラウディアの正常な思考も大幅に失われた。

〈主人公〉

「急にこんな事を言つてごめんね。聞いてくれるだけでいいの。わたし……あなたが好きです。

今も、本当は『始業式に戻りなさい』って言わなきやいけないのに、できない……。まだここにいてほしいって思っちゃった。ごめんね。こんな事を言つて。困るよね」

「息づかいだけで驚きを表現する」
！」

クラウディア、主人公の言葉が信じられず、一瞬フリーズする。
予想だにしていない展開である。

だが正直、ここで勇気を出すのはまだよつと怖い。

これが現実か確かめるために、正直なところ、主人公にはもう一回はつきり『好き』と言つてほしい。

そうしたら、私、思いつきり行けるのに……。と思う。

だが、すぐに気づく。今の主人公はこの調子だ。

今『好きつてもう一回言つてもらおう作戦』はダメだ。
クラウディアは、決め手に欠けているまま行くしかない。

主人公の言葉には頼れない。『今すぐ決めろ……』と、己を奮い立てる。
たとえ今、主人公は今頭がおかしくなつていて、両想いらしいのは、自分の完全な勘違
いでも構わない。

今が気持ちを伝える、絶好のチャンスだ！

「【優しくきっぱりと】

……いいえ。困つてなんかいません。困る訳、ないじやありませんか。

【かわいくすねる】

先生だつて、とつくにご存知のくせに。

【少し間をあけてから】

私も、先生の事が大好きです。

初めて声をかけてくれたあの日から、ずっと。

先生は優しいから。

もう、自分でもどうしたらしいかわからないくらい好きになっちゃってるんですよ。

【『知つてるくせに♥』という感じで】

ご存知でしよう?

【すごく優しく】

だから、何も心配しないで下さい。私はここにいます

〈主人公〉

「ディイディ……！」

SE14 ..主人公がクラウディアに抱きつく音

【頭から最後まで流す】

主人公、クラウディアに抱きつく。

クラウディア、いよいよどつちが年上なのかわからなくつて来たが、これこそが自分の望んだ事なのだと気づく。

自分は以前主人公に『困っている時に、年上とか年下とか、先生とか生徒とかはない。助けられる人が助けるのが当然だ』と言った。

今回、それができたのかもしれないと思うと、とても嬉しい。

主人公を優しく抱きしめて、その背中を撫でる。

SE15 ..クラウディアが主人公の背中を撫でる音

【頭から最後まで流す】

「すごく優しく」

ああ、泣かないで。先生。

私たち、同じ気持ちなんです。私、今、とても幸せです」

……あ、そうだ、悩み。まずいまずい。

クラウディア、主人公と抱き合つて幸せに浸りかけていたが、ここでハツ！ と気づく。問題はまだ解決していなかつた。

〈主人公〉

「ありがとう。でもね。わたし、デイデイにこんな事言つてもらう資格ないの。わたし……」

クラウディア、身構える。

『ああ、これ、先生自爆するつもりだ。良心の呵責に耐えきれなくなつて、例の件まで全部しやべつちやうつもりだ。……あれつて、さすがの私でも、事前に知つてなかつたらちよつと引くやつなのに、このタイミングで言つちやうつもり？ 先生それはダメ！ そんな事したら先生のメンタルが壊れちゃう。はい止めますよ』と思う。

「【すごく優しく】

大丈夫ですよ。それは、言わなくていいです。

【少し間をあけてから】

というか……私、本当は知ってるんです。先生が体調を崩された理由。とてもお悩みになつて いる事があるからですよね？

【少し間をあけてから】

ごめんなさい。私、ここに来たの初めてじゃないんです。
何かおかしいと思いませんでしたか？

なんで私は、さつきから『先生には困り事がある』という前提で話しているんでしょう。
それから、どうして迷わず教師寮の先生の部屋まで来られたんでしょうね？」

クラウディア、先ほどまでの自分の行動が、結果的には伏線になつたな、と思う。
これなら、主人公も納得してくれるはずだ。

とうとう、何かを察した表情……具体的にはさらに青ざめた表情になつている。

〈主人公〉

「えっと……？」

「ええ、ご想像の通りです。二十八日だったかな。
ここに夜、一人で來たんです。先生の忘れ物を届けに」

クラウディア『これだと二十八日に一回だけ忍び込んだみたいな言い方だな。

本当はあと三回来てます。つまり毎日来てたんです。先生最後まで気づかなかつたけど。

先生の部屋つて、すぐ近くにある室外機の音がめちゃくちゃうるさいんですよね。

先生はこれが原因で、外の音がわからなくなつていたみたいですね』

……と思うが、これは言わない。

〈主人公〉

「……今ね、オチが全員死亡の怪談を、知つていて聞いている気分だよ。

つまりわたしという主人公の死は確定してるって意味だよ。

その日の夜なら、わたし、ずっとここにいた。なのに」

クラウディア、内心すっかり呆れているが満更でもない。

『……だったら、こつちはギヤグの説明をするみたいな恥ずかしさなんですけど？
ていうか、これ最後まで言う必要ある？ 先生はそういうのが好きな変態なの？
私の気遣い、めつちや水泡なんですけど。
あんまりだわ。付き合うけど！』と思う。

「はい。お会いできませんでした。

だつて、先生はお取込み中でしたから」

〈主人公〉

「一応確認すると。偶然お手洗いやお風呂に行つていたという可能性は……？」

「【※マークまで、内心呆れつつも、すごく優しく】

いいえ。先生は部屋の中にいらっしゃいましたよ。

私、とても近くまで来ていたのに、先生は気づかなかつたんです。
先生、ほとんど人のいない寮だからつて油断しすぎです。

【ひとりきわ優しく】

ダメですよ。あんな声出しちゃ。

……あの。ここまで言えば伝わりますよね？」

※

〈主人公〉

「…………ごめんなさい…………」

【普通に心配している】

「はい。見つかったのが私だつたからいいものの。気を付けて下さいね」

「主人公」
「……はい」

しばし沈黙。

主人公、恥ずかしさで頭が真っ白になる。

だが、この件の被害者であるはずのクラウディアは、あまりにもこれまで通りである。なのでつい、普通に返事をしてしまう。

そのまま沈黙が訪れるが、やがて何かがおかしいぞ、と気づき、質問する。

「主人公」

「……ディディ、怒ってないの？　わたしの事、嫌いにならないの？」

対するクラウディア『あ、来ましたね』と思う。

今回の件でわかった事だが、主人公は割と『言わせたいタイプ』らしい。だが、今回の件に関しては、自分にも問題がある。

なので、積極的に『そんな事ないよー！』と言わせていただこうと思う。

「【これっぽっちも怒ってない】

怒る？まあ、心配にはなりましたけど。大好きに決まってるじゃありませんか。
……それどころか、すごく嬉しかったんですよ。

【だんだん楽しくなつてくるが優しく】

だって。私の名前、呼んでましたよね。それも一度じゃない。

【声は優しいが『まあ、少しくらい意地悪してもいいか……』と思つている】

先生は、私の名前を呼びながら。このお部屋で……」

〈主人公〉

「わー！」

「あははっ♥」

〈主人公〉

「ひどい！ デイデイ！ ひどいよ！ そこまで言わなくとも！」

「ふふふ♥

【※マークまで、すごく優しく】

それに、先生がお悩みになられた理由もわかりますよ。

【申し訳なさそうに】

私がそういう事を、すごく嫌っていると思っていたんですね。

私、先生にたくさん心配をかけてしまいましたよね。ごめんなさい。
でも、もう大丈夫ですよ。

私たち、両想い。なんですから。

【ぼそつと言ふ。恥ずかしい】

ちょっとくらいえつちな想像してくれたって構いません」 ※

（主人公）

「…………！」

クラウディア、改めて思う。そう、そもそも自分が全部悪いんだった。

もし自分が性にオープンな性格だつたら、主人公はここまで悩む事もなかつただろう。
そんな自分には多分一生かけてもなれないが、心配をかけてしまつた以上は、できる限
りの事をしたい。

そう思っていると、主人公がボロボロと泣き出す。

〈主人公〉

「あっ……。ごめんね。なんかホツとしちゃって……。

デイデイは優しいんだね。わたし、怒られるんだとばかり思つてたよ。

二度と口いてもらえないくらい、いや、それで済めば全然いい方つてくらい、めちゃくちゃに嫌われると思つてた」

クラウディア『全体的に、どつかできいたセリフですね今のこと。完全に私と先生が初めてお話しした時のそれですね……』と思う。

そうだ。あの時、主人公はまつたく怒らなかつた。

悪い事をしているクラウディアを許してくれただけではなく、心配して付き添ってくれたのである。

だつたら、自分が主人公を許すのはますます当然の事に思える。

こうなるために、八月二十八日、自分はあの光景を目撃したような気さえしてくる。

〈主人公〉

「でも、あの。やっぱり悪い事をしたと思つてるので。

わたしにできる事があれば何でも……」

「思わず笑ってしまう。『やっぱりそう来たか』と思っている」

「はい。こういう時、先生がお詫びをしないと気が済まないたちなのは存じ上げてます。【少し間を開けてから。さほど重要そうでもない感じで】

「じゃあ、一つ聞いてもいいですか？」

「あの時、先生はスマホで何か見てらっしゃったと思うんですけど。
あれはなんだつたんですか？」

「だが、とりあえず謎は解いておこう。後々もやもやしたくないし。

〈主人公〉

「あの！ 盗撮とかじゃないよ！」

主人公、クラウディアの質問に慌てふためく。

しかしクラウディアは、これによつてますます『とりあえず盗撮じゃないのは間違いないな……。ではやはり、アダルトコンテンツですかね』と確信する。

話しているうちに、主人公の顔色もさつきよりずっと良くなつた。
なので、テストも全部サボりたいくらいだけど、この話を聞いたら戻ろうつと……。
と、安心する。

「『もちろんわかっています』という感じで」

「わかつてますよ。先生が盗撮なんてするはずありません。
だから、余計気になつたんです」

〈主人公〉

「えつとですねえ。あの。その件なんですが……」

SE16 .. 主人公がスマホを取る音
【頭から最後まで流す】

SE17 .. 主人公がスマホを起動する音
【頭から最後まで流す】
【やや小さめの音量で流す】

しかし、ここで主人公がスマホを起動し、クラウディアに手渡す。
クラウディア、青ざめる。

えつ。見せるんだこの人……変態かな？

「はい。

【ぎょっとする】

え？ 見ていいんですか？」

〈主人公〉

「逆に、できるだけ一個一個、しつかり見てほしいんだよね。
タイトルを読み上げてくれたってかまわないよ」

変態だつた……。

クラウディア、青ざめる。

でも、すぐに『どうしよう。えらい人につかまっちゃった。
今からでも学校に戻ろうかな。
藪にいた蛇をつづいた感がすごいんですけど。

見るの怖いー。引くくらいえぐいのばつかりだつたらどうしよう。

いや性的嗜好はその人の自由ですけど。

妄想だけにとどめているのなら、どんな事もまあだいたい許されますけど。

ていうか、逆に自由だからこそ、私なりにこの件そのものを黙つてようと配慮したのに。

この人はなんで自分から見せようとするのかなー？

私そこまでしろなんて言つてないよね。

……でも興味ある。すごいある！

もし先生が黒ギャルとか好きだつたら色々考えなきやいけないし……。

ていうか、私が引きそうな内容なら、さすがに見せようとはしないか。
よし、わかった。どんどん來い変態』
と思う。

「【ちょっと引いている】

じゃあ、見ます、よ?」

（主人公）

「はい」

しばらく沈黙。

クラウディア、主人公が表示させたスマホのページを見る。
そこには、とあるサイトで購入したコンテンツが一覧になつていて
つまり、ブラウザから直接各コンテンツを閲覧できるようだ。とても便利なサービスで
す。

そしてクラウディアは、すぐに主人公がこれをわざわざ自分に見せようとした理由を悟
る。

そこには『清楚』『お嬢様』『学園』『制服』『学生』『年下』『ロングヘア』『敬語』『巨乳』
『百合』といった、自分を連想させるキーワードが並んでいたからである。
タイトルで内容がすぐにわかるのが主流の時代でよかつた。
あと買ってるものの自体は、さほど変態の範疇でもない。ただの清楚系JK好きだ。

主人公はおそらく、このあたりのタグを必死に漁つて買い物をしたのだろう。
それから、昔からこういう嗜好というわけでもないらしい。
購入日でわかる。一番古いのさえ一ヶ月以内だ。少なくとも、このサイトの利用を始めたのはごく最近のようである。

そして、極めつけのキーワードはこれだ。

『水濡れ・透け』。購入日は八月下旬。なるほどね……。

先生つたら、ここまで露骨に私の事を……。ちょっと変態だけど……。

クラウディア、すべてを悟つてスマホから目を上げ、主人公を見る。

あと、いくつかのタイトルは覚えたのであとで自分でも買っておこう。後学のために。

主人公は、恥ずかしそうに、申し訳なさそうに縮こまっているくせに、何だか嬉しそうである。

やつぱりだいぶ変態だ。

クラウディア、そんな主人公に『これから、これまで封印していた技を使うが、そこは許してほしい』と思う。

「〔呆れつつもすごく嬉しい〕

……先生が何をおっしゃりたいのかはわかりました。私と同じタイプの子だから、大目に見ろって事ですね？」

〈主人公〉

「そうじゃなくって。その。そのくらい、あなたが好きです……」

「もう……
♥」

クラウディア『ああ、言わせちゃった。『言わせる系』は封印したテクニックだったのに。
でも、これくらい、いいよね?』と思う。

恥ずかしくなつてきたので、再び主人公のスマホに視線を戻す。

【わざとちよつと意地悪に】※わざとなのがわかる、あからさまな感じでお願いします
うわあ、これ、よく集めましたね。こういう漫画とかを見て。先生は私とあれそれする
想像を補強してたんですね?

【わざとらしくため息をつく】
……はあ。

あの。前言撤回です

〈主人公〉

「えっ」

主人公、ぎょつとして顔を上げる。

クラウディアは、それがかわいくて仕方がない。思わず笑ってしまう。
今日から自分たちの関係が新しく始まるんだと思うと、わくわくする。

やっぱり手段を選ばない行動なんて、とらなくて良かつた。

自分は主人公に笑つていて欲しい。それから自由でいて欲しい。
自分でいやらしい妄想をするくらいなら、全然かまわない。

それに、そんな程度の事でここまで罪悪感を抱いて、こんなにも苦しんだ主人公に対し
て、申し訳なくもあれば、同時にいとおしくてたまらないとも感じる。

……ていうか、だいたい同じ事、私だつてするし。したし。

まあ、それをここで言おうとはしないのがね、私のずるいところなんだけど……。
ところで……。

「かわいく怒る」

やつぱり私怒つてます。先生には罰として、もう一つお願ひを聞いていただきます。
【少し間を開けてから】

今後私でえっちな妄想をしたら、それがどんなものか、絶対に私に報告する事♥
【少し間をあけてから】

たつて私。先生の事もつと知りたいです。

【嬉しくてしようがない】

今日から、先生の彼女になるんですから。ね♥』

このままフェードアウトして終了。